

評価内容			R5	R6	R7	自己評価	学校関係者評価	
生 豊 み か な す つ 生 徒 が 指 導	①教職員は、子ども一人一人を理解し、大切にしている	生徒	3.51	3.48	3.48	B	教職員が生徒一人ひとりに対して硬軟織り交ぜた関わりをしていることが、生徒・保護者の安心感や信頼につながっていると言える(①・②・③)。多様性を包摂する共生社会を築いていくことが求められていることを踏まえ、すべての教職員がすべての生徒を認めるとともに、他者の意思や心情を汲み取ろうとするエンバシーを、生徒が高めていくことができるよう支援していきたい。	
		保護者	2.81	3.06	3.03			
	②教職員は、生命を大切にす心や社会のルールを守る態度を、子どもに身に付けさせている	生徒	3.52	3.70	3.66	A		
		保護者	3.15	3.18	3.11			
	③教職員は、子どもの間違っ行動に対して適切に指導している	生徒	3.65	3.67	3.63	A		
		保護者	3.08	3.14	3.08			
す べ て の 子 ど も の 学 び を	④学校は、基礎的な学力が身につくようにわかりやすい授業をしている	生徒	3.51	3.53	3.50	A	生徒からの評価は安定して高く、過年度の結果とあわせて安定して高評価を得ている(④・⑤・⑥)。3年間を見通して日々の授業や学習支援を行ってきた成果だと言える。その一方で、家庭での学習は学校での学習に比べると評価が下がる(⑦)ため、学習への動機づけを支援していく必要がある。 また、生徒と保護者の評価には乖離が見られる(④・⑤・⑥)が、これは教職員が念頭に置いている学力(思考力、判断力、表現力などの見えない学力)と保護者が求める学力(テストの点数や内申点などの見える学力)との違いから来るのではないかと考えられる。生徒が、学び続けることのできる大人になるために、前述の「見えない学力」をも重視した学習を推し進めていることを、保護者に喧伝していかねばならないと感じる。	
		保護者	2.97	3.05	3.07			
	⑤教職員は、子どもの興味や意欲を高める授業を工夫している	生徒	3.42	3.40	3.43	B		
		保護者	2.94	3.01	3.01			
	⑥学校は、子ども個々に応じた学習の手助けを行っている	生徒	3.55	3.53	3.54	A		
		保護者	2.81	2.80	2.81			
	⑦家庭では、自主的、計画的に学習に取り組んでいる (保護者)家庭では、お子さんによりよい学習習慣が身につくように意識している	生徒	2.99	3.01	3.01	B		
		保護者	2.89	3.03	3.03			
安 心 し て 学 べ る 学 校 環 境	⑧教職員は、安全で、安心できる学校、学級づくりに取り組んでいる	生徒	3.52	3.43	3.50	A	多くの生徒にとって、学校は安心・安全な場になっていると言える(⑧・⑨)。今後も「いじめはどの子供にも、どこでも起こりうる(浜松市いじめの防止等のための基本的な方針より)」という意識を持ち、生徒が放つ些細なサインを見逃すことがないよう、生徒の言動に注視していく。なお、表面化しない隠れた部分で不適応が起こっている可能性は常に否定できず、生徒が気軽に相談できる雰囲気をつくることが不可欠である。	
		保護者	3.15	3.19	3.15			
	⑨教職員は、「いじめ防止基本法」に基づいて、いじめ行為の未然防止、いじめ対応、いじめ行為の再発防止に適切に対応している	生徒	3.48	3.52	3.56	A		
		保護者	3.08	3.10	3.08			
と も に 育 つ 地 域 ・ 校 種 間 連 携	⑩地域行事やボランティア活動に積極的に参加している (保護者)家庭では、お子さんが地域行事やボランティア活動に参加するよううながしている (教職員)ボランティア指導は適切であった	生徒	2.39	2.28	2.38	C	多くの教職員が面接練習会、キャリア講座、生き方講話などを通じた地域の支援を実感している(⑩・⑪)。学校は地域のハブであるべきであり、これらの活動に携わってくださる方が、生徒にとってその場限りのスペシャルゲストではなく、常にそばにいる身近な存在だと実感できるように、教職員から意識的な声掛けを行いたい。 ボランティア活動については、その意義を認めつつも、休日の過ごし方の選択肢の一つでしかない、捉えている生徒・保護者は多い(⑩)。社会貢献活動に参加することは、視野を広げたり、自主性を身につけたりすることにつながるため、週末や長期休業などを利用した参加を促していく必要がある。	
		保護者	2.65	3.00	2.97			
		教職員	3.15	3.53	3.53			
	⑪地域人材の活用は適切であった	教職員	3.03	3.06	3.21	B		
⑫学校運営協議会、コミュニティ・スクールの運営は適切であった	教職員	3.06	2.97	3.40	B			

評価内容			R 5	R 6	R 7		自己評価	学校関係者評価
双方向のかかわり のかかわり な家庭	⑬学校は、三者相談や教育相談が充実しており、相談しやすい	保護者	2.93	3.01	2.92	C	学校が「相談の機会を十分に有していない」「家庭・地域と連携・協力でできていない」「情報発信が不十分である」と考えている保護者が多い(⑬・⑭・⑮)。生徒の活動や学校の様子については、毎月発行している学年だよりや学校だより、毎日更新しているblogなどを通して伝えているが、その頻度が少ないのか、あるいは、保護者が求めている情報は別なものなのかを、検討する余地がある。	
	⑭学校は、家庭・地域と積極的に連携・協力している	保護者	2.98	2.67	2.61	C		
	⑮学校は、たよりやホームページなどで情報をよく発信している	保護者	3.17	2.86	2.78	C		
	⑯授業参観会、教育相談、三者面談の運営は適切であった	教職員	3.30	3.28	3.53	A		
前向きで活動的な 学校文化	⑰学校生活は楽しい (保護者) お子さんは、学校生活を楽しいと感じているようである	生徒	3.62	3.58	3.57	A	学校生活については生徒・保護者の評価は高い数値で安定しており、満足度は高いと言える(⑰・⑱・㉑)。学校を取り巻く環境が大きく変わる中で、新しい学校づくりに携わることができる喜びと責任を感じつつ、よい方向に転換する柔軟な発想をすべての教職員が持って、責務を果たしていく。 部活動に関しては、現在、「地域展開」に向かう真ただ中にあり、戸惑いや不安を感じる層が、特に教職員に多くあることが、結果から見てとれる(⑱)。生徒の指導に当たる教職員自身が、地域展開に向かう目的を見直し、マインドセットを変えていく必要がある。	
		保護者	3.32	3.33	3.20			
	⑰学校行事は楽しく、充実している (保護者) お子さんは、学校行事を楽しみにしている (教職員) 文化活動発表会、体育大会の運営は適切であった	生徒	3.69	3.65	3.62	A		
		保護者	3.46	3.44	3.30			
		教職員	2.44	3.28	3.14			
	⑱部活動は楽しく、充実している (保護者) お子さんにとって部活動は、充実した活動になっている (教職員) 部活動指導は適切であった	生徒	3.62	3.62	3.64	A		
		保護者	3.38	3.37	3.35			
		教職員	2.79	3.09	3.18			
戦略的で柔軟な 学校運営	⑳将来の進路や職業について学んだり、考えたりしている (保護者) お子さんは、学校で将来の進路や職業について学び、考えている (教職員) 総合的な学習における3年間を見通した指導は適切であった	生徒	3.04	3.27	3.28	B		
		保護者	2.78	3.00	2.82			
		教職員	2.41	2.85	3.03			
	㉑キャリア教育は適切であった	教職員	3.18	3.33	3.30	B		
	㉒全員チーム担任制(R5は学年担任制)により複数の教員が様々な視点で生徒を見ることで、生徒のよさを共有したり、小さなサインや変化を生徒の成長につなげられている。	教職員	2.80	2.91	2.88	C		
㉓全員チーム担任制において「働きがい」を見つけることができています	教職員	2.20	2.14	1.88	C			
㉔水曜日の放課後の活動(東中塾、学級運営委員会など)はうまくいっている	教職員	2.70	2.56	2.95	C			
気持ちのそろう 教職員集団	㉕学校教育目標「自らの可能性に挑戦し続ける生徒の育成」、スローガン「THINK CHALLENGE CREATE」を意識しながら教育活動に携わることができた。*R6スローガン「THINK CHALLENGE CREATE」R5スローガン「THINK & CHALLENGE」	教職員	3.18	3.13	3.09	B	総合的な学習の時間では、2年次に実施する「地域探究プロジェクト」を軸にした活動を、昨年度まで行ってきた。今年度からはその活動から離れ、本校独自の学習計画を作成し、活動を展開している。昨年度と比較して、進路指導、キャリア教育における生徒、保護者、教職員の評価に大きな変化がないことから、新たな取組にスムーズに移行してきたことが分かる(㉕・㉖)。「地域の人・もの・ことに関わる学習を通して、目的や根拠を明らかにしながら課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を育成する」という目標が揺らぐことがないように、常にそれぞれの活動の目的を生徒に確実に伝え、どのような力が身につけているのかを、生徒自身に実感させる必要がある。 全員チーム担任制や水曜日の放課後の活動について、教職員の充足度は高くない(㉕・㉖・㉗)。「情報共有の機会を十分に持てない」「責任を伴った指導につながりにくい」「生徒も教職員もやるべきことが時間のわりに多く、腰を据えた活動ができていない」など拳がった意見を整理したうえで、問題の所在を明らかにし、改善策を講じていきたい。	
	㉖組織で指導・支援にあたることで、各々がもつ知識や技術を学ぶ機会を得ることにつながっている	教職員	3.07	3.00	2.96	C		

*R5・R6・R7にある数値は、アンケートにおける回答を点数化した数値(そう思う:4点、だいたいそう思う:3点、あまりそう思わない:2点、そう思わない:1点)の平均値であり、A・B・Cの3段階で評価している。
*評価内容にある8つのカテゴリは、「スクールバス・モデル ーカのある学校の8つの要素ー」からの引用である。(参考文献:志水宏吉「公立学校の底力」ちくま新書)